

山岡莊八

徳川家康

佗茶の巻



卷の茶の佗

八莊岡山



講談社

徳川家康(13)

佗茶の巻



昭和34年3月20日 第1刷発行 ￥320

昭和40年3月30日 第34刷発行

著者 ヤマ 山 岡 荘 八

東京都文京区音羽町3-19

発行者 野 間 省 一

東京都新宿区改代町23

印刷所 多田印刷株式会社

発行所 東京都文京区音羽町3-19 株式会社 講談社
電話東京(942)1111 大代表
振替東京3930

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

(黒柳製本)

© Sohachi Yamaoka 1959

目

次

妻ならぬ母		七
頂上		六
人生のとげ		五
北野の風		三
立正夜話		七
小田原算用		二
開戦前夜		三
小田原進撃		四
朝日のまゝに		七

生れ来し塔……………一六

日蔭の陽射……………二七

人みな醜く……………二四三

北条崩れ……………二六三

東への星……………二六

常勝関白……………二九

江戸の本心……………三二五

不吉な秋……………三三〇

扉 装
絵 幀
木 杉
下 本
二 健
介 吉

徳川家康

佗茶の巻

妻ならぬ母

一

朝日御前はその日も侍女三人、小者四人を連れて城を出た。

浜松城から移つて来て、駿府で迎えるはじめての秋であつた。

家康はいま上洛していて城にはいない。留守居に松平家忠がやつて来ていて、しきりに京との間を飛脚が往来している。無事に関白と対面もすみ、予定のとおり権大納言に任ぜられて、仕合せよい日を送っていると家忠は御前に知らせて呉れた。

朝日御前にとつて、大納言も関白も自分とは縁遠い高い空の雲とおなじようなものであつた。ただ御前の養子になつている長松丸が、こんど元服

して兄から秀忠という名乗を貰い、従五位下の侍従になつたという話を聞いた時にはなぜか心がときめいた。

自分の子ではない。これも、兄と良人の間で必要から仮りに母子の盃を交させられた仲に過ぎない。それが何時かこの城では御前にとつていちばん親しめる対象になつていく。

秀忠は、いかにも几帳面な礼儀正しい子で、駿府城にある時には、毎朝必ず大奥をおとずれる。

そして、男にしては白すぎる両手をそろえて、「――母上さま、お早うございます。ご機嫌はいかが？」

判でおしたようにおなじ事を云つた。

（これも誰かに命じられているのであろう）

誰か……と云うまでもなく、今は亡い生母の西郷の局……そう思うと御前ははじめ秀忠が憎かつた。いや西郷の局が嫉（ねた）ましかつたのかも知れない。

ところが、その秀忠は、生母が亡くなつても決してその習慣を崩さなかつた。心なしか、生母を失つて、一層義母に親しみを覚えて来たように感じられる。

（あの子が、ほんとうに私の胎はらから産れた子であつたら……）

そんなことを何時からか御前は考えるようになっていた。

「――御台所さま、御台所さまを、浜松からこの城へお呼びなされたのは何誰どなたさまかご存知でござりまするか？」

老女にそう云われた時、御前は小首を傾げて相手を見返したものであつた。

「――上様ではござりませぬ。若君さまでござりまするそうな」

「――まあ、長どのが、わらわを？」

それからは、秀忠の顔を見ない日は一日何か落着かない気がするようになっていた。

その秀忠の顔も、今日で三日見ない。秀忠はいま浜松の城に行つて、大久保彦左衛門や忠隣なかつらを相手にして鷹狩をやつてゐる。

「御台所さま、あれが、安倍村の瑞竜寺でございませう」

侍女の一人に、行手に見える森を指されても御前はすぐに返事が出来なかつた。秀忠の行つてゐる浜松城を險に描いて、ぼんやりと歩を運んでいたからだつた。

「もし、御台所さま、どこかお加減でも……？」

「いゝや、何でもないのじや」

「あ、お危うござります。木の根が道に」

つまずきそうになつた躰を支えられて、御前はわびしげに笑つた。

「若君は、浜松から何日ごろお歸りやらのう。怪我でもせねばよいが……」

「ホホ……」と、侍女は笑つた。

「何がおかしいのじゃ。若君のことを云うてはわるいか」

御前は自分でもおかしかつたと見えて、

「何やら胸さわぎがしたのじゃ。大きな猪でも出て来まいかと」

「出て来たら喜んで獲物に致しましょう。若君さまも、もうご立派なお腕前ゆえ」

「そうであるうのう。その筈じゃ」

御前は自分で自分に云いきかすように、

「でもふしぎなものよなあ。殿はとにかく若君は愛おしい」

侍女は答えなかつた。妻とは名のみ、二人並んで家臣に見えるのは正月の賀詞を受ける時だけの夫婦……それが、何かを愛さずにいられない女性の心のはけ口を、若君に向けているとわかるからであつた。

「このように道が悪いと知つていたら、興を先に

寺へやるのではござりませなんだ」

「いゝや、よいのじゃ。この高い空の下で、若君も駆けておわす。わらわもそれで歩いてみようなつたのじゃ」

「お歸りには、お興がござりまするゆえ、では、もうしばらく」

「おゝ歩こうとも」

そう云つたあとでふと首を傾げて、

「それにしても、北の政所はどうして瑞竜寺という寺をご存知であつたやら？」

と、つぶやいた。

瑞竜寺は別段徳川家とも朝日御前とも何のゆかりもない寺だつた。それが、大坂城の北の政所からよい上人が居るゆえご参詣あるようにと手紙で云つて来たのである。いや、それよりも直接参詣をすゝめたのは大坂からついて来ている侍女の小萩であつた。

「——お気晴しに是非ともご参詣なされませ。北

の政所さま帰依なされておわす高德が、京からお下りの由にござります」

そう云われて出て来る気になつたのだが、歩いてみると思つたよりも遠かつた。

「さ、お手を取りましょう。石段が古びて居ります」

杉木立の深い梢でしきりに土鳩が鳴いている。

その声に氣を取られて、またつまずきかける御前の手を小萩と若い侍女が両方から支えていつた。

「鳩が鳴いている。わびしいものよなあ」

「ほんに、夜になつたら梟も鳴きましよう」

「梟は昼は眼が見えぬそう。夜しか知らぬ鳥

……哀れなものよ」

「さ、山門まで寺の衆がお出迎えでござりまする」

「ほんに氣遣いさせて、却つて氣の毒な」

「なにをおつしやります。大納言さまの御台所がお運びある。寺の名誉この上もござりませぬ」

「御台所がなあ……名ばかりの」

「と仰せられても若君のご母堂さまではござりませぬか」

「そうじゃ、若君が戻られたら、今日の寺詣での話聞かせてやりましよう」

古びた山門の下に三人の僧と、先着している輿について来た小者たちが、うや／＼しく出迎えていた。

その間を御前は、あぶない足どりで八間四面の本堂わきの、天井の低い客殿に通つていつた。

三

何となく手持ぶさたであつた。

もとより顔見知りではない上に、相手の応対が仰々しすぎる。はじめ小坊主が茶をさくげて入つて来て、出てゆくとこんどは白いひげを垂れた老僧が入つて来た。

たぶんこの寺の住持であろう……そう思つてい

るとこれもうや／＼しく菓子をすゝめ、ようござ詣なされたと、畳に額をすりつけるようにして挨拶しただけで、緊張しきつた面持で出ていった。

誰がどう命じたのか侍女たちまでが遠ざけられて、しばらく朝日御前は客殿にひとりになつた。

（徳川大納言の妻……）

口の中で呟^{つぶや}いてみても、どうしても実感は伴つて来なかつた。いぜんとして自分は自害して果てた先夫の妻なのである。その証拠に見る夢の中へはいつも家康の顔はない……

（結局人生そのものが一つの夢なのではあるまいか。その夢を夢とも知らずに、泣いてみたり、怖れてみたり、怒つてみたりしているのかも知れない）

御前はそつと自分の手を見、膝を見やつた。そこに自分の躰がある……と、思うのがすでに夢中の錯覚で、死ぬ時が夢のさめる時なのではあるまいか……？

そんなことをぼんやりと考えているところへ、こんどはまた二十七、八に見える若い僧が紫衣をまとつて入つて来た。そのうしろに老女の小萩が附添つている。

若い僧は、さつきの老僧のように丁寧すぎる挨拶はしなかつた。

「京からお下りなされた藤蔭上人でござります」
小萩が云うと、相手は軽く目礼しただけでじつと御前をみつめている。御前はうなずいただけで、何も云わなかつた。

云うことが無いのである。

「御台所さま。その後お躰の加減はいかゞでござりまする」

若い僧の方から、しばらくして話しかけた。

「さあ別に……」

「ずつとご気分がすぐれませぬように伺いました
が」

「誰に……であろう？」

「はい。北の政所さまや大政所さまから」

「いゝえ、近ごろは丈夫になりました」

「駿府のご生活はいかゞでござりまする」

「いかゞ、と云うて……変つたこともありませぬ」

「何か。お辛いことはござりませぬか」

「べつに……」

「徳川さまとのお仲は？」

「相変らず……」

「時々、京や大坂がおなつかしいうござりましようなあ」

「いゝえ、どこも同じようなものゆえ」

若い僧はそこでちらつと小萩を見やつて、それから一膝すゝめて来た。

「御台所さま、実はこの藤蔭、閑白さまから密命をおびて参りました」

「まあ、殿下から……!?」

「はい。いよく京に聚楽第が出来上りましたの

で、来月上旬には大政所さまはじめ、北の政所も三好さま奥方もみなあの地に移られます。そも
じの考えはどうじや……と、こう仰せられました
が……」

そこで、若い僧は又刺すように朝日御前を見て
いつた。

四

朝日御前は、ぼんやりと首を傾げて相手の僧を
見返していた。

兄の密使だというこの僧侶。住みたいと云えば
そのまゝ聚楽第に移して呉れそうなのぶらだつた
が、何故そのようなことを兄が云うのであろうと
なると、皆目判断はつかなくつた。

いや、そこまで考えて見ようとする氣力がす
でにないのかも知れない。

「いかゞでござりまする。駿府は住みにくうはご
ざりませぬか」

御前は答える代りにもう一度首を傾げて考えた。

（住みよいというのだろうか？ それとも、住みにくいと云うのだろうか？）

「御台所さまが、もし京に住みたいとの思召ならば、みんなて聚樂第にお移りある時が好機と存じまするが」

「さあ……？」

「大政所さま、北の政所さま、みなお移り遊ばしたうえ、北野に一世一代の大茶会をおひらきなさる。いま京はその噂で持切つて居りまする」

御前はあまり黙っているのが、相手に気の毒に思われ、そつと小萩を見やつて救いを求めるように瞬きした。

しかし、今日の小萩は助け舟を出さなかつた。

却つて僧に味方して、

「御台所さま、思うまゝをお答えなされませ。大政所さまも、三好さま奥方も、御台所さまに会い

とう思はされておいでなさる由でござりまする」

「小萩……」

「はい」

「こなた知つていやるようじや。殿下はなぜわらわを駿府へおきとう無いのであろう？」

「これはしたり、置きとうないなどと……愛おしいご肉親のことゆえ、若しこの地でご不自由なされておわしてはと、それをお案じなされてのお言葉でござりましょう」

「そうであらうか」

「それ以外に何の意味がござりましょう、なあお上人さま」

若い僧はこくりとした。

「そうか……」

と、御前はうなずいて、

「それならば、お案じ下さりますると、そう申したもれ、世の中はどこも別に変らぬものじや」

「と、仰せられると、お歸洛のお心はない……と、こうおつしやりまするので」

「歸つてもおなじこと。それゆえお案じないように」

僧は鋭い眼をして小萩を見やつた。小萩はそれをおさえる様に小さく頷き、改めて笑顔をつくつて朝日御前に向き直つた。

「御台所さまは、童女のようなことをおつしやる。でも、それはご本心ではないような。やはり都で大政所さまとお暮しなさりたいのに違いないのでござりまするなあ御台所さま」

「いゝや」

御前はもう一度ハッキリと首を振つた。

「わらわもようやく駿府になじんだ。それに長丸どのも居ることゆえ、動くのが氣うといのじや。なあ小萩、そなたはそんなことを思わぬかえ。どうせ夢に似た人の世ながら、女に生れた甲斐に、母らしい心になつて暮してみたいとは……」

……？」

小萩は困惑しきつた表情で膝をすゝめた。

五

「御台所さま、聞く人もないゆえ小萩は齒に衣着きぬせずに申上げます。都へお住居なされませ」

「なぜじや。こなた、わらわの云うた、母らしい心になつて生きて見とうはないと云やるか」

朝日御前は抗まかう……という程の口調ではなかつた。たゞ、思うまゝを……と云いながら、それを口にする、ひどく心外らしい小萩の言葉に疑念を抱いた程度であつた。

小萩は額に汗をにじませて息をついだ。

「御台所さまの、やさしいお心はよくわかります。わかりまするゆえ一層申上げねばなりません。長丸君とて、決して心は許されませぬ」「なに、長どのに心が許せぬとは？」

「御台所さまのお胎はらを痛めたお子と云うではな